

◎ 美術館情報

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、多くの美術館等で、臨時休館やイベントの休止、展覧会の中止や開催期間の変更、および入館方法等が変更になっています。

状況が日々変動しているため、各施設の公式ホームページなどで最新の情報をご確認ください。

1. とこなめ陶の森 資料館・陶芸研究所【愛知・常滑】(<https://www.tokoname-toumori.jp/works>)

7月10日(土)～9月26日(日)

陶芸研究所 開所60周年特別企画展:

【日々、唯々、陶芸一筋】陶人 沢田重雄

常滑市指定無形文化財保持者の一人である沢田重雄氏は秘色焼製陶所に入社、勤務の傍ら作陶に励んできました。陶磁器デザイナーの日根野作三氏の指導を受け、全国の公募展で多数の入賞を経験しています。定年退職後も陶芸に対する真摯な姿勢と研究意欲は衰えを知らず、90歳を迎えてなお活躍を続けています。本展では、最新作を含め、沢田氏が胸に込めた独自の世界をご紹介します。



2. 岐阜県現代陶芸美術館【岐阜・多治見】

(<https://www.cpm-gifu.jp/museum/events/event/event-2823>)

9月13日(月)～10月31日(日)

企画展: 台湾現代陶芸の力 台湾・新北市立鶯歌陶瓷博物館所蔵品による台湾では、1960年代頃から伝統的な手工芸をベースに芸術としての陶芸が志されるようになり、海外の同時代作品が初めて一堂に会した1981年の中日現代陶芸作品展などをきっかけに、創造的な現代陶芸が花開きます。以来、台湾の陶芸シーンは欧米の現代美術の潮流、中国大陸の伝統的技術、日本の現代陶芸思想なども糧とし、多様な文化が織りなす重層的な社会を反映した、独自の発展を遂げてきました。本展では、台湾の現代陶芸シーンの今を伝える造形的な作品から、独自の茶芸文化を反映した茶器類まで、躍進を続ける台湾現代陶芸の多面的な魅力を、台湾・新北市立鶯歌陶瓷(しんべいしりついでんぐーとうじ)博物館のコレクションを通じて紹介します。



* 新北市立鶯歌陶瓷博物館と岐阜県現代陶芸美術館は文化交流協定を締結しており、本展はその交流事業の一環として開催するものです。

3. アサヒビール大山崎山荘美術館【京都・乙訓郡】(<https://wakozecca.exhibit.jp/>)

9月18日(土)～12月5日(日)

特別企画展: 和巧絶佳展 令和時代の超工芸

本展覧会では、日本の美意識に根ざした工芸的な作品によって、いま最も注目されている1970年以降に生まれた作家12人を紹介します。展覧会タイトル「和巧絶佳(わこうぜっか)」は現在の日本における工芸的な作品の三つの傾向——日本の伝統文化の価値を問い直す「和」の美、手わざの極致に挑む「巧」の美、工芸素材の美の可能性を探る「絶佳」——を組み合わせた言葉です。この展覧会は現在の日本の工芸の新しい兆候を示すだけでなく、これまで受け継がれてきた日本の手仕事の可能性を考える機会となることでしょう。



4. 兵庫陶芸美術館【兵庫・丹波】 (<https://www.mcart.jp/exhibition/e3302/>)

9月11日(土)～11月28日(日)

企画展：ザ・フィンランドデザイン展－自然が宿るライフスタイル

本展は、フィレンソ社やマリメッコ社のテキスタイルをはじめ、同時代の絵画、アルヴァ・アアルト(1898～1976)、カイ・フランク(1911～1989)ら巨匠たちのガラス工芸や陶磁器、家具など、世界中の人々を魅了し続けるフィンランドデザインの名品が一堂に会します。ヘルシンキ市立美術館監修のもと、タンペレ市立歴史博物館、フィンランド・デザイン・ミュージアム、コレクション・カッコネンなどのコレク



ショ約250点と関連資料約80点を通して、白夜と極夜に象徴されるドラマティックな季節の移り変わりの中、自然に触発されながら、生きとし生けるものたちと共存するフィンランドの人々の、豊かな発想力と彩り、そして創造性にあふれた世界を紹介します。

5. どうしん美濃陶芸美術館【岐阜・多治見】 (<https://www.shinkin.co.jp/tono/toshin/pdf/minotougei.pdf>)

9月15日(水)～12月12日(日)

企画展：国際陶磁器フェスティバル美濃'21 協賛事業 「MINO 茶碗 100-2021-」



国際陶磁器フェスティバル美濃'21の協賛事業として、「MINO 茶碗-2021-」を開催します。美濃陶芸作家の中から、人間国宝から若手作家まで100碗の茶碗を展示します。個性豊かな茶碗の数々をお楽しみください。

6. 愛知県陶磁美術館【愛知・瀬戸】 (https://www.pref.aichi.jp/touji/exhibition/2021/t_hanahana/index.html)

10月9日(土)～12月12日(日)

特別展：華＊花－四季の花と中国陶磁史－

「中華(中国)の美しい花」という意味を込めた本展では、四季を彩る「牡丹」「蓮」「菊」「梅」に焦点を当て、南北朝時代から清時代の「三彩」「青磁」「青花」「五彩」など多種多様な中国陶磁を紹介します。中国では「文様」を指す用語として「花文」という言葉が用いられます。へら彫りの「劃花」、鉄絵で描く「黒花」、スタンプ文様の「印花」、白地に青の「青花」など、花の色彩と技法について概観します。また、作品にみられる花の象徴する意味、色や状態、呼称等について、中国古典や漢詩の世界観から捉えることで、魅力的な花物語を紹介します。[詳細は21～24頁参照]

